

《報告》

ホタルが取り上げられた七不思議について

後藤 好正

神奈川県横浜市港北区新羽町 675-202

はじめに

ある地域で、他とは異なる動植物や不可思議な自然現象、あるいは神仏の奇瑞や妖怪変化などの超自然現象と思われた不思議や奇異が7つ選ばれたものが七不思議である。古くは嘉禎4年(1238)の奥書をもつ『諏訪上社物忌令之事』に諏訪大社七不思議が見られ、神威を示すものとして用いられている(村下, 2007)。江戸時代中期になると、当時の生活感覚で不思議や奇異と観じられた現象が選ばれ世間話として定着し(宮田, 2007)、日本各地で伝承されてきた。これら七不思議のなかには、数は少ないものの不思議のひとつとしてホタルが語られているものが見られる。本稿ではホタルに関わる民俗の基礎資料としてホタルが取り上げられている七不思議をまとめておく。

なお、ホタルの漢字表記は螢で統一した。

ホタルが取り上げられた七不思議

七不思議の中にホタルが取り入れられていた事例は次の4ヶ所である。なお、ホタル以外の七不思議個々の内容については割愛した。

1. 阿部倉の七不思議(神奈川県横須賀市)

- (1) 明神の相生の松, (2) 向山の南面の月, (3) 湯の沢の昼の螢, (4) 湯の沢の夫婦石,
(5) 湯の沢の朝夕の霧, (6) 平山の片葉の葦, (7) 萩野の勝手水

湯の沢の昼の螢: 湯の沢地区では、昼でも螢が光を出して飛ぶ。『古老が語るふるさとの歴史 衣笠編』

2. 芦屋の七不思議(兵庫県芦屋市)

- (1) 芦屋沖の竜灯, (2) 打出沖の海鳴り, (3) 金兵衛車、焼け車, (4) 七右衛門ぐらのたたり,
(5) 鱧切岩の雨乞い, (6) 法恩寺の潮湯, (7) 螢合戦の怪火

螢合戦の怪火: 夏至近くなると螢は群をして右にとび左にとび、また一つ一つがまい寄って、まりのようなかたまりとなって、空中をさまよい、ついには地上に落ちたり、川面に流れたりする。

あちらこちらで大球となり小球となり乱れとぶ光景は三夜にて止む。これを里人は、螢合戦といい、また「(在原)業平の魂化して螢となる」と称し、古くから芦屋の里の七不思議の一つに数えられていた。

『芦屋郷土誌』

3. 宇生賀の七不思議(山口県阿武町宇生賀)

- (1) 高尾の三度栗, (2) 友弘の不鳴の蛙, (3) 黒川の不食の蛭, (4) 宇生賀の浮田,
(5) 深田の埋木, (6) 黒川の螢合戦, (7) 上万猫池の満干

黒川の螢合戦: 螢合戦は黒川にあり。此辺熊田堤の流れ、町木清水、長泉庵清水など流れ出て落合所、川幅一間半も有之。螢も此辺の川端に多く集まりて行交ふ様、合戦のかたちをなす様に見え申候(句読点筆者)。

『福賀村郷土誌』

4. 多治比の七不思議（広島県安芸高田市）

願光寺の螢合戦：昔、毛利元就公の時代に吉田町多治比に平佐城という城があり平佐市之丞という武士がいた。それと元就公とがいくさをされたことがあった。公の方は小勢で平佐勢の方は大勢だったが、とうとう元就公が勝たれた。その合戦の様を毎年旧の五月十日に猿掛城の麓の願光寺で螢が演じている。とても賑やかな螢合戦で、あとで螢はだんごになって多治比川に落下するのだという。

『高田郡むかしむかし』

同書には続けて、「この螢合戦は多治比七不思議の一つで、竜谷の尻切にら（蝮のこと）、久々根の夜鳴石、ほしだの根芹、川原の転び岩、猿掛山の六方石、門出の青苔などとともに珍しがられている」と記されており、これらが残りの七不思議かと思われるが確証はない。『吉田町の伝説昔ばなし』には“見坂の夜泣石”が多治比七不思議の一つとして載る。

七不思議の中のホタル

確認できた七不思議のうち、3例は螢合戦を不思議としている。一般に国語辞典では「多くの螢が群れ飛び交うさま」を螢合戦として定義しており、宇生賀の七不思議はこれに該当する。一方、芦屋の七不思議ではホタルが鞠のような塊になって飛び交うと伝えられていた。こうした現象は、たとえば浅井了意の『狂歌咄』（寛文12年刊）に「数千万のほたる、川のおもてに、むらがり、あるひは、まりの大きさ、あるひは、それより、なを大に、丸かりて、空に舞あがり」と記されているように、江戸時代から記録され、生物学的にはこちらの現象を螢合戦として扱っている。芦屋の七不思議の前述の伝承は、まさにこの現象を語っている。また、多治比の七不思議も「だんごになって落下する」ので、あるいはこうした現象も見ることができたのかもしれない。芦屋や多治比の七不思議で螢合戦を行うホタルは、在原業平や毛利・平佐勢の戦死者の魂が変化したものであるが、戦死者等の魂がホタルに変化する伝説は日本各地にあり、独自に生じていた伝説が、七不思議のひとつに取り入れられたとも考えられる。

阿部倉の七不思議は『衣笠地区古老のはなし』では、(1)明神の相生松、(2)向山の南面の月、(3)萩野の勝手水、(4)湯本の朝煙、(5)湯本の陰陽石、(6)平山の片葉の葦、(7)湯の沢の螢で、内容も少し違うものがある。「湯の沢の螢」は「この阿部倉には昔は源氏螢がたくさんいたんです。螢合戦もみられたといひます。美しくて不思議なものだったんでしょ」と語られている。前記の伝承はあるいはより不思議にあわせて昼でも光るとされたのかもしれない。七不思議には「一般には名所とされるようなものすら含まれている」(Wikipedia「七不思議」)ということなので、阿部倉や宇生賀の七不思議はそうした事例に該当しそうである。

江戸時代になると、ホタルは夏を代表する景物のひとつとして、広く庶民にまで親しまれるようになる。前記『狂歌咄』では螢合戦を「こゝハ螢のあつまり、えならぬ興をもよをせり」と始めているように、ホタルが集まって塊になる現象も、多くの場合、不思議というよりも奇観として捉えられたに違いない。こうしたホタル観が、ホタルが取り入れられた七不思議がわずかな例に留まっている理由のひとつと考えられる。

おわりに

本稿ではホタルに関わる民俗資料として七不思議を紹介した。しかし、これまでの調査で七不思議にホタルが取り上げられている事例は、わずか4例にとどまっている。もし、他地域での事例をご存じの方がおられたら、ご教示いただければ幸いである。

文 献

- 浅井了意（1998）狂歌咄．仮名草子集成（朝倉治彦編）第23巻．東京堂出版
- 藤村頼義編（1954）福賀村郷土誌．福賀村役場．
- 細川道草編（1963）芦屋郷土誌．芦屋史談会．
- 村下重夫（2007）「七不思議」の項．世界大百科事典（改訂新版）．平凡社．
- 宮田 登（2007）「七不思議／近世日本の七不思議」の項．世界大百科事典（改訂新版）．平凡社．
- 小都勇二（1968）高田郡むかしむかしー高田郡伝説民話集．郷土史調査会郡山文庫．
- 山口県阿武町教育委員会編（2015）未来へ伝えたい阿武の昔ばなし．山口県阿武町教育委員会．
- 横須賀市衣笠公民館編（1976）衣笠地区古老のはなし．横須賀市衣笠地区公民館．
- 横須賀市市長室広報課編（1983）古老が語るふるさとの歴史 衣笠編．横須賀書籍出版．
- 吉田町郷土史研究会編（1988）吉田町の伝説昔ばなし．吉田町郷土史研究会．
- Wikipedia 「七不思議」：〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/七不思議>〉2018年8月1日参照